

【2007年度第2回研究会発表要旨】

ウイлта語口頭文芸の伝聞形式：サハリンにおける言語接触の可能性

山田祥子

ウイлта語の口頭文芸では、伝聞（人から伝え聞いた情報であること）を表わす言語形式がしばしば見られる。本発表では、第一に、このウイлта語伝聞形式の特徴と機能について考察を述べる。第二に、近隣諸言語との比較をとおして、口頭文芸における伝聞形式がサハリンの地域の特徴であるという仮説を提示する。これにより、サハリンを中心とする地域の言語接触ないし文化接触のようすをさぐる可能性を拓げていきたい。【本号「研究ノート」として掲載】

(やまだ・よしこ／北海道大学大学院)

人類史における「音」の文化制度化の研究：日本列島出土の音響発生器具を例にして

荒山千恵

人類史において、人工的な「音」を操作する行為が認められるようになるのは、どのような歴史的状況においてであろうか。本発表では、日本列島から出土した音響発生器具について取り上げ、それらがいつ、どのように出現・展開したのかを、文化制度化という点に着目し、考古学的な分析から検討する。人間と「音」との関わりについての研究は、民族音楽学、音楽史学、音楽心理学など、さまざまな分野に通じる共通テーマである。文字資料や録音技術のない過去の「音」文化をどのように再構成することができるのか、方法論的な模索も含めて発表する。【本号「研究ノート」として掲載】

(あらやま・ちえ／北海道大学)

沖縄県粟国島の水瓶（トゥージ）をめぐる文化の現在

中畑 剛

沖縄列島に転座する島々では地理的な条件により真水を安定的に確保する事が難しい土地が多く、古来よりその土地に生きる人々たちの手によって生活用水を得る工夫がなされてきた。

その特有な環境のもとで水を得るために独自の工夫を行ってきたものが粟国島のみに存在する「トゥージ」という石でできた水がめである。

本研究発表は札幌国際大学の2005年第9回、及び2006年第10回沖縄調査団に参加したことで収集した、島のカップの水瓶の民俗文化の現在を明らかにするものである。

かつて島の人々はカップを作るためユイを組織し、手作業で崖から岩をくり抜き、舟に縛り付けて海を迂回して陸に揚げ、各家々に大変な労力と手間をかけて人力で運搬してきた。大正頃までは島で家を造るということは、このカップを掘り抜いて家まで運ぶという大仕事も

意味していた。つまりトウージのためにどれだけ人手を集めることのできる家かを示すことになり、その結果としてのトウージの大きさや数が、その家の家格を示していたのである。

現在でもトウージが家の威信を示す機能は依然として担っており、多くの家では、既に水がめとしての役割を終了しているトウージを今でも大切に保守管理している。乾くと割れてしまう凝灰岩できているため、人々は常に水を張り、水をかけ、割れ目を補修したりしていた（写真参照）。

トウージは現在に至るまで、単なる水を溜めるための道具ではなく、島の文化を語るうえで欠かすことの出来ない役割を果たしている民具である。また、島に伝わる説話や民話にはトウージに関するものが多く登場している。

島の女性神役の一人であるノロから、ある時トウージの神様が、人々に水を与えているのに誰も感謝しないと怒り、転ばされたことがあると話してくれた。

もちろん現在では水道網が普及し、トウージは本来の役目を終えてしまったが、自分たちの先祖から引き継いできた民俗文化として島から持ち出すことは禁止されている。

(なかはた・つよし/榎カンペ共販北海道)



トウージはこのように大中小が並び、それぞれ使用目的を異にしていた。